

アク・ベシム遺跡出土のヒツジ距骨と キルギスの伝統的遊戯チュコ

安倍 雅史・新井 才二

Three Worked Sheep Astragali Excavated from
Ak Beshim and Traditional Kyrgyz Game, *Chuko*

Masashi ABE and Saiji ARAI

本論考では、キルギス共和国アク・ベシム遺跡のカラ・ハン朝時代（10世紀後半）の街区から出土した加工痕を持つ3点のヒツジの距骨を紹介する。この資料は、チュコと呼ばれるキルギスに伝わる伝統的遊戯と同様の遊びに使用された可能性が高いと思われる。現代にまで伝わるこの伝統的遊戯の歴史は、考古資料からは、キルギス国内では、カラ・ハン朝時代まで、さらには1千年紀前半まで遡ることができる。また、ユーラシア全体を見た場合、チュコと類似した遊戯の歴史は、おそらくは紀元前9千年紀にまで遡るものと思われる。

キーワード：ヒツジの距骨、アク・ベシム遺跡、チュコ、キルギス、伝統的遊戯

This paper introduces three worked sheep astragali excavated from a Qara Khan layer (late 10th century) at Ak Beshim in the Kyrgyz Republic. This paper suggests that these worked astragali were probably used as throwing pieces in a game resembling the modern traditional Kyrgyz game, *Chuko*. The history of game similar to *Chuko*, probably goes back to the early 1st millennium AD in Kyrgyz at the latest and 9th millennium BC in Eurasia.

Key-words: sheep astragalus, Ak Beshim, *Chuko*, Kyrgyz, traditional game

1. はじめに

アク・ベシム (Ak Beshim) 遺跡は、シルクロードの天山回廊を代表する都城址である。この都城址は、キルギス共和国の首都ビシュケク市の東方45 kmに位置している (図1)。

アク・ベシム遺跡は、中国文献に登場する碎葉 (スイアープ) 城に比定されている (加藤 1997; 内藤 1997)。碎葉城の歴史は、5世紀に遡る。当時、西方から多くのソグド人がこの地に入植したが、碎葉城もまたソグド人の入植者によって建設されたと考えられている。以後、シルクロード交易の発展に伴い、碎葉城は、天山回廊を代表する商業都市に発展していく。

7世紀には、碎葉城は西突厥の政治的中心地となる。有名な大唐西域記と大慈恩寺三蔵法師伝には、玄奘がインドに赴く途中、碎 (素) 葉城に立ち寄り、西突厥の王に面会したことが記載されている¹⁾。また有名な唐代の詩人李白もこの地の出身だと言われている。

7世紀後半には、唐が西域に侵攻、西突厥を屈服させ、西域支配のための軍事拠点碎葉鎮をこの地に置いたことが

知られている。

唐が西域から撤退したのちも、碎葉城は、トゥルゲシ、カルルク、カラ・ハン朝の中心的都城として栄え続けたことが知られている (ケンジェアフメト 2009)。

東京文化財研究所は、2011年よりアク・ベシム遺跡において考古調査を実施している²⁾。2011年に測量調査を実施し、2012年から発掘調査を行っている (山内ほか 2012, 2013, 2014; Abe 2014)。

アク・ベシム遺跡の考古調査は、19世紀末以来、おもにロシアとキルギスの研究者によって進められてきたが、発掘調査は、宮城やネストリウス派教会、仏教寺院など公共的な建造物を対象に行われてきた。一方、一般街区の発掘調査は、限定的に行われてきたに過ぎず、多くの考古学的課題が未解決のままである (加藤 1997; Amanbaeva et al. 2012)。そのため、東京文化財研究所は、シャフリスタンの中心部に30 m×20 mの調査区を設定し、発掘調査を実施している (図2)。

この発掘調査によって、最上層からカラ・ハン朝時代の南北に走る大通りとその両脇に立ち並ぶ一般住居址が出土

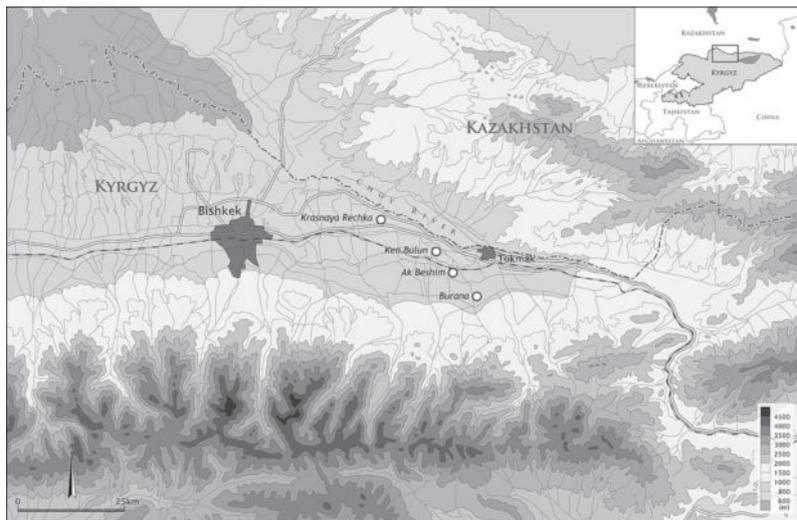


図1 アク・ベシム遺跡の位置

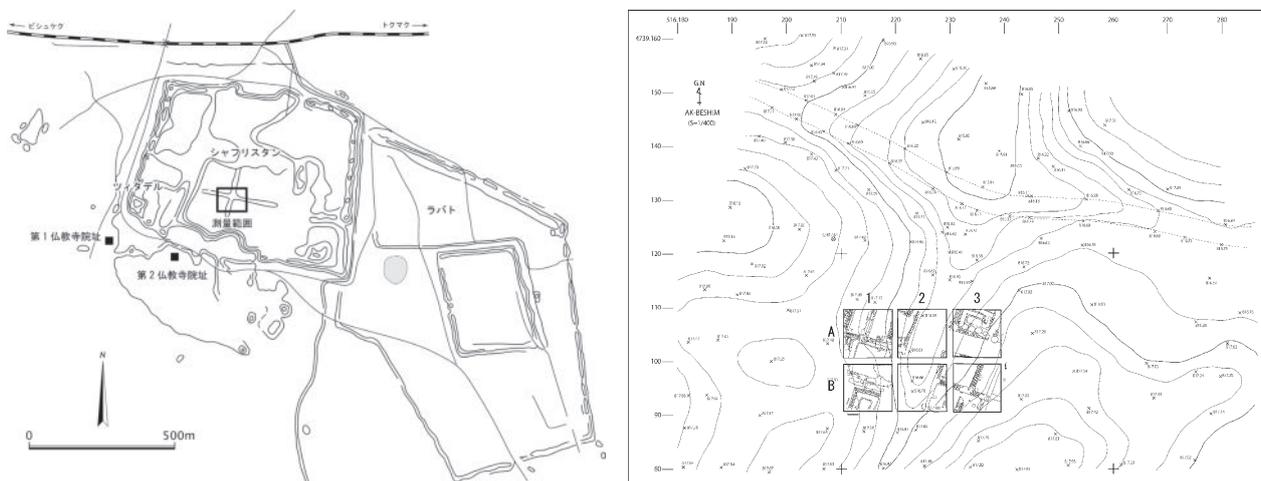


図2 アク・ベシム遺跡 (左) とシャフリスタン内区中心部の測量図

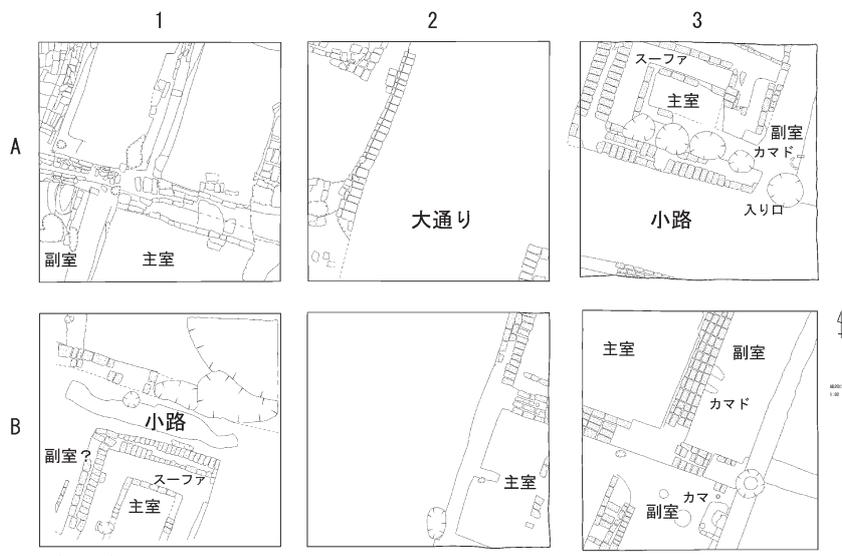


図3 出土したカラ・ハン朝期の一般街区

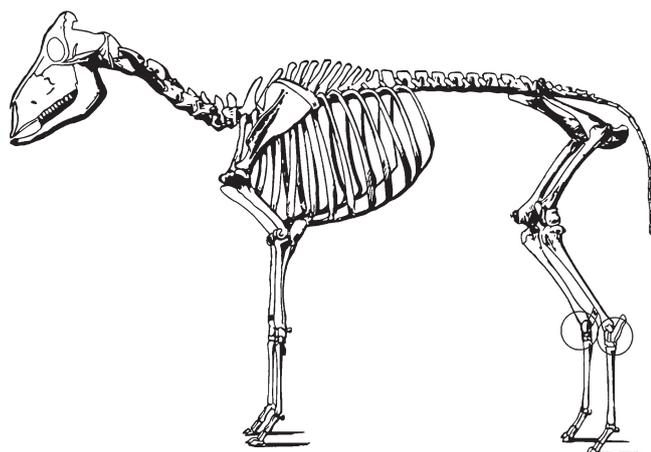


図4 ヒツジの距骨の位置

した(図3)。この街区は、放射性炭素年代によって、10世紀後半に年代付けられている(山内ほか2014; Abe 2014)。

本論考では、このカラ・ハン朝の街区から出土した3点の加工痕を持つヒツジの距骨を紹介し、この資料が、チュコと呼ばれるキルギスの伝統的遊戯と同様の遊びに使用された可能性が高いことを論じる。その後、チュコまたチュコに類似した遊戯が、キルギス国内またユーラシア全体で、どこまで遡るのか、若干の考察を行う。

2. アク・ベシム遺跡から出土した加工痕を持つヒツジの距骨

2014年2月に、筆者の一人(新井)が、10世紀後半のカラ・ハン朝の層から出土した動物遺存体の分析を実施した。2012年の発掘によって1,800点ほどの動物遺存体が出土したが、その中に3点の加工痕を持つヒツジ距骨が含まれていた(図5)。以下、これら3点の資料に関して記述する。

資料1: ヒツジの距骨の外側面、内側面、前面の3面が研磨され平坦に加工されている。

資料2: 資料1のように研磨された痕跡はないが、後面に線刻が施されている。

資料3: 外側面から前面に抜けるよう穿孔がほどこされている。

筆者らは、これら3点の資料は、子供の遊戯に使用されたと推測している。以下、「チュコ(Chuko)」と呼ばれるヒツジの距骨を用いたキルギスの伝統的遊戯を紹介したい。

3. キルギスの伝統的遊戯チュコ

今回、チュコに関して、ビシュケク市在住のジャーナリストであるミルラン・ベクトゥルスノフ(Mirlan Bektursunov)氏に聞き取り調査を行った。本論考では、ベク

トゥルスノフ氏からの聞き取りをもとに、キルギスの伝統的遊戯チュコを紹介する。

チュコとは、キルギス語でヒツジの距骨を意味する。これが転じ、ヒツジの距骨を使用した遊戯もチュコと呼称される。

ヒツジの距骨を使用した遊戯は、現在、東はモンゴルから西はトルクメニスタンと、北方ユーラシアに広く分布している。また、トルコやイラン、イラク、シリアでも同様の遊戯が報告されている(松谷1992; Dandoy 1996; Schaeffer 1962; Watson 1979)。これらの遊戯は、ロシア語ではアルチック(Alchik)、モンゴル語ではシャガイ(Shagai)と呼ばれている(ツァスチヘル2006)。

チュコにはヒツジの距骨を利用した複数の遊戯が含まれるが、ここでは、最も一般的な投擲遊戯を紹介する。

この遊戯は、現在、ビシュケク市内ではあまり見られなくなったが、キルギスの田舎では、いまでも子供たちにとって一般的な遊びである。

以下にチュコの遊び方、ルールを紹介するが、これはベクトゥルスノフ氏が子供の時に遊んでいたルールである。チュコの細かいルールは、グループや地域ごとに異なるという。

チュコの遊び方、ルール

- 1) まず、一緒に遊ぶ仲間を集める。参加者は、それぞれヒツジの距骨(チュコ)を持ち寄る(図6-1)。
- 2) そして、持ち寄った距骨を一列にならべる。この際、各自が何個ずつ距骨を出し合い並べるかは、その場の話し合いによって決定する。ここで置かれた距骨が的となる(図6-2)。
- 3) 的に投げつける距骨は、チュコの中でも特別にサカ(Saka)と呼ばれる。この遊びを行う上で、サカは非常に重要である。ヒツジの距骨の中で、とくに大きくて重く、手に馴染み投げやすいものがサカとして選ばれる。通常、子供たちは、愛用するサカを所有し、大事に保管している。的となる距骨を並べたのち、サカをサイコロに用い、投擲する順番を決定する。距骨には4面あり、それぞれアイクル(Aikur、外側面)、ター(Taa、内側面)、ブク(Buk、後面)、チク(Chik、前面)と呼ばれている(図8)。強さの順番は、アイクル>ター>チク>ブクと決まっている。代表者が、参加者からそれぞれのサカを受け取り(図6-3)、サカを同時に転がし、出た目の強さで投擲の順番を決定する(図6-4)。ただし、全員のサカが全て、チク、ブクであった場合は、サイコロを振りなおす。
- 4) そして的からある程度離れ、そこから順番にサカを的に投げつける(図6-5、6-6)。投げ方はアンダー・スローで、親指と人差し指で距骨をつまみ、スナップを利かせ反



内側面



外側面



後面



前面

資料1



資料2 後面



資料3 外側面

図5 アク・ベシム遺跡から出土した加工痕を持つヒツジ距骨

時計回りに回転を加えるようにして投げる。サカが的の距骨にあたり、的の距骨を元の位置から3足長(約60~70cm)以上弾き飛ばせば、その弾き飛ばした距骨を自分のものにすることができる。

5) 順番に投擲を行い、的となる距骨を弾き飛ばし、最後

に最も多くの距骨を手に入れた参加者が勝者となる。逆に的に一切当てることができず最下位になった者には、最後に残った距骨一つが与えられ、次の遊びにも参加できるように工夫されている。

さてチュコの一般的な遊び方を説明したが、実際にサカ



1. 仲間を集める



2. 的となるヒツジの距骨（チュコ）を並べる



3. サカをサイコロ代わりにする



4. 出た目で投擲の順番を決める



5. 狙いを定める



6. サカを的に投げつける

図6 キルギスの伝統的遊戯チュコの遊び方



1. 狙いを定める



2. サカを的に向けて滑らせる
図7 年少者用のチュコの遊び方

を投げ、的にぶつけ弾き飛ばすことは意外に難しい。とくに年少者が、このルールで遊ぶことは困難である。そのため、年少者用に、より簡単な別の遊び方が存在する。

年少者用のチュコは、一般的なチュコと基本的な遊び方は一緒であるが、サカを投げるのではなく、サカを地面の上あるいは床の上を滑らせ、的にぶつけはじき飛ばすという点で異なる(図7)。

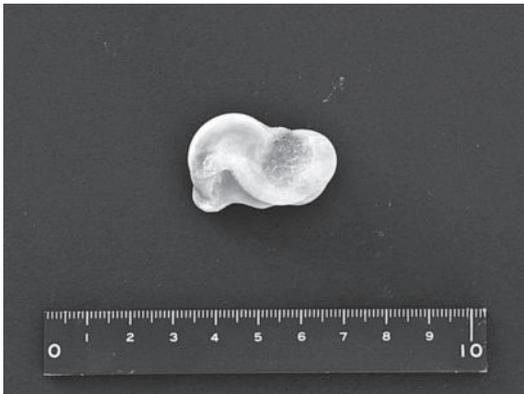
チュコの裏技とサカの改造

基本的にチュコには、未加工の距骨が利用される(図

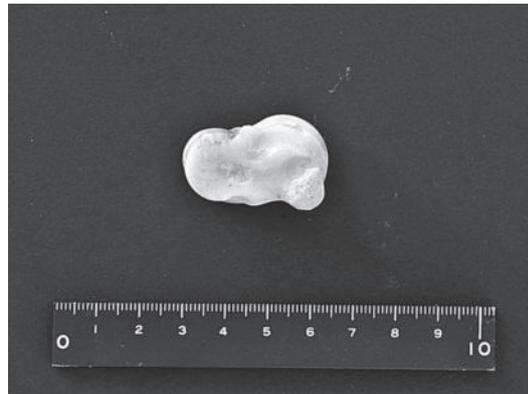
8)。しかし、かつて日本の子供たちがメンコやベーゴマに改造を施したように、チュコにも勝つために様々な裏技が存在する。

最も一般的な裏技は、サカの前面の窪みに鉛を流しこみ、重くするというものである(図9)。サカが重ければ重いほど、的にあたった際に的をはじき飛ばす力が大きくなり有利になる。

また、年少者用のチュコにも裏技が存在する。サカの面を研磨し平坦にすることによって、サカがスムーズに滑るように加工するというものだ(図9)。サカの面を平坦に



アイクルの面 (外側面)



ターの面 (内側面)



ブクの面 (後面)



チクの面 (前面)

図8 現在のチュコ



図9 現代の改造サカ（距骨の前面の窪みに鉛を埋め込み、かつ平坦に研磨されている）

すると、的にあたる確率が断然高まる。

これらの裏技、サカの改造は、グループや地域によっては禁止されている。

4. アク・ベシム遺跡出土のヒツジ距骨とキルギスの伝統的遊戯チュコ

筆者らは、アク・ベシム遺跡から出土した3点の加工されたヒツジ距骨は、チュコと同様の遊戯に使用された可能性が高いと考えている。

とくに資料1は、3面が平坦に研磨されており、滑りをよくするよう改造されたサカである可能性が非常に高い。また、アク・ベシム遺跡からは出土していないものの、前面の窪みに鉛を流しこんだヒツジの距骨が、近隣のプラナ(Burana)遺跡とノヴォポクロフカ(Novopokrovka)2遺跡のカラ・ハン朝の層から出土している³⁾。これらの資料は、明らかに、重さを増すために改造されたサカであると考えられる。

また、資料2と資料3も、サカとして用いられた可能性が十分考えられる。前述したように、チュコを行う上で、サカは非常に重要で、子供たちは、愛用するサカを所有し大事に保管している。想像をたくましくすれば、資料2は当時の子供が目立つように愛用するサカに線刻を施したものの、資料3は愛用するサカに紐を通し首からぶら下げることができるように、穿孔を施したものとも考えられる。

5. 伝統的遊戯チュコの起源に関する一考察

最後に、キルギスの伝統的遊戯チュコの起源に関して、簡単な考察を行いたい。現在のチュコには、通常、未加工のヒツジの距骨が使用されている(図8)。しかし、遺跡から未加工の距骨が出土したとしても、単にヒツジが食されゴミとして距骨が捨てられた可能性も高く、単純にヒツ

ジの距骨の出土例をもって、チュコの存在を想定することはできない。また、チュコには生骨が使用されるため、衝撃痕といった使用痕が形成されにくいと考えられる。

チュコの起源を考える上で、①加工された距骨と②出土コンテキストが鍵になると考えられる。まず、面を平坦に加工した距骨や鉛を流しこんだ距骨が出土した場合、これらの距骨がチュコと同様の遊戯に使用された可能性が高い。また、出土コンテキストも重要である。例えば、もし住居址の片隅から *in situ* の状態で、複数のヒツジの距骨がまとまって出土した場合、このヒツジの距骨は、例え未加工であっても、ゴミではなく、遊戯に使用された可能性が考えられる。

まず、キルギス国内の事例を追ってみたい。前述したようにアク・ベシム遺跡、プラナ遺跡、ノヴォポクロフカ2遺跡のカラ・ハン朝の層からは、面を平坦に加工した距骨や鉛を流しこんだ距骨が出土している。これらの事例から、キルギスに伝わる伝統的遊戯チュコは、カラ・ハン朝期、10世紀にまで遡るものと考えられる。

また、キルギス国内では、1世紀から5世紀に栄えたケンコル(Kenkol)文化の墓から、ヒツジの距骨(未加工)が複数まとまって出土した例が知られている⁴⁾(図10)。これらは副葬品として墓に埋納されたものであり、遊戯に使用された可能性が考えられる。現在、チュコの存在を示す例としては、キルギス国内最古のものである。

前述したように、チュコに類似した遊戯つまり距骨を投げたり、滑らせたり、あるいは指ではじいて的にぶつける遊戯は、現在でもモンゴルからトルクメニスタン、トルコ、イラン、イラク、シリアとユーラシアに広く分布している。そこで、ユーラシアにおける事例を次に追ってみたい。

レヴァントおよび東地中海地域における距骨の出土事例に関しては、G. ギルモア(Gilmour)が1997年に集成を行っている(Gilmour 1997)。そこで、ギルモアの集成を中心に、北方ユーラシア、ヨーロッパまた近年の事例を付け加え、ユーラシアにおける事例を時代順に追ってみたい⁵⁾。

まず紀元前1千年紀の事例だが、北方ユーラシアのスキタイやサルマタイ、匈奴といった騎馬遊牧民の墓からは、頻繁にヒツジの距骨が出土している。とくに、子供の墓からヒツジの距骨が出土する傾向があり、遊戯に使用された可能性が高い(ツァスチヘル 2006; Erdenebaatar 2010; Johannesson 2011: 229; Jones and Joseph 2008: 39; Miller et al. 2008; Vlassov 2010)。ほかにもイランのラメ・ザミン(Lameh Zamin)、イスラエルのメギド(Megiddo)、タアナク(Taanach)、トルコのアリシャル・ホユック(Alishar Hüyük)などからも距骨が出土している(松

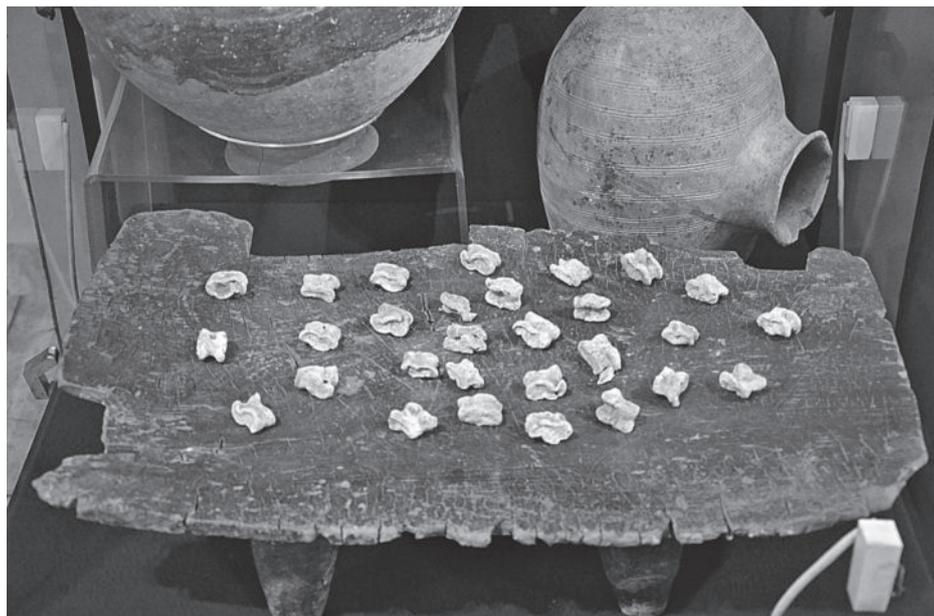


図10 ケンコル文化の墓から一括して出土したヒツジ距骨（キルギス国立博物館所蔵）

谷 1997: 133; Gilmour 1997: 168, 169)。ラメ・ザミーンでは、1つの墓から、面が平坦に加工されたヒツジの距骨が出土している（松谷 1997: 133）。メギド遺跡からは、一つの土器の中から、684点もの距骨（大半がヒツジとヤギの距骨）が一括して出土している。その中には、面が平坦に加工されたものや銅や青銅が流し込まれたものも含まれている。アリシャル・ホユックからも面が平坦に加工されたものや、鉄や錫が流し込まれたヒツジの距骨が出土している（Gilmour 1997: 168, 169）。

紀元前3千年紀、2千年紀の事例も多い。北方ユーラシアのヤムナヤ文化やアフアナシェヴォ文化に関しては、後のサカや匈奴と同様に、とくに子供の墓からヒツジの距骨が出土する傾向が知られている（Kovalev and Erdenebaatar 2009: 152; Mallory 1991）。ほかにも、イスラエルのメギド、ラキシユ(Lachish)、ベト・シャン (Beth Shean)、シリアのウガリット (Ugarit)、エブラ (Ebla)、イラクのウル (Ur)、ヌジ (Nuzi)、トルクメニスタンのゴヌール (Gonur)、トルコのアリシャル・ホユック、キュル・テペ (Kültepe) などからも距骨が出土している（Gilmour 1997: 167-170; Minniti and Peyronel 2005）。エブラでは、幼児の墓の中から、ファイアンス製容器とともに147点もの距骨が一括して出土している（Minniti and Peyronel 2005: 8）。そのうち、研磨によって面が平坦に加工されたものは19点であった。また、ウガリットやアリシャル・ホユックから出土した距骨には、鉛が流しこまれていた。ほかにも、有名なエジプトのツタンカーメン墓からは、距骨形をした象牙製品が出土している（Gilmour 1997: 167-170）。

紀元前5千年紀、4千年紀の事例も知られている。ブルガリアのヴァルナ (Varna) 遺跡は、墓域から大量の金製品が出土したことで有名だが、この遺跡からは距骨形をした黄金製品も出土している（Gilmour 1997: 170; 中日新聞社 1979: 70）。また、ルーマニアのポドゥリ・デアルル・ギンダル (Poduri-Dealul Ghindaru) 遺跡では、家の基礎からウシやシカ、ヒツジの距骨が25点まとまって出土している。そのうち17点の距骨は、磨研により面が平坦に加工されていた。また14点の距骨の前面の窪みには緑錆が付着しており、本来は、銅が距骨の前面の窪みに埋め込まれていたものと推定される（Bejenaru et al. 2010）。

紀元前7千年紀、6千年紀のイラクのハラフ (Halaf) 文化のヤリム・テペ (Yarim Tepe) I 遺跡、バナヒルク (Banahilk) 遺跡からも、遊戯に使用されたと思しき距骨が出土している。バナヒルク遺跡はハラフ文化の集落遺跡だが、面が平坦に加工されたヒツジ（あるいはヤギ）の距骨が5点まとまって出土している（松谷 1997: 138; Watson 1983: 577）。また、墓地遺跡であるヤリム・テペ I 遺跡では、1基の墓からガゼルの距骨が200個一括して出土している（Yoffee and Clark 1993）。

また、紀元前9千年紀のベルギーのルムシャン (Remouchamps) 洞窟からは、3面を平坦に加工したヤギの距骨が出土している（Gilmour 1997: 170）。この資料が、現段階では、遊戯に使用された可能性のある最古の距骨である。

このように、キルギス国内を見た場合は、チュコに類似した遊戯は1千年紀前半まで、ユーラシア全体を見た場合は、紀元前9千年紀にまで遡る可能性が考えられる。

謝辞

本論考をまとめるにあたり、ミルラン・ベクトゥルスノフ氏、キルギス共和国国立科学アカデミーのアイダイ・スレイマノヴァ (Aidai Sulaimanova) 氏、ヴァレリー・コルチェンコ氏 (Valery Kolchenko) 氏、ノボシビルスク州立大学のクンボロト・アクマトフ (Kunbolot Akmatov) 氏、東京文化財研究所の山内和也氏から多大なるご協力を賜った。この場を借り、感謝を申し上げたい。

註

- 1) 『大唐西域記』
清池西北行五百餘里、至素葉水城。城周六七里、諸国商胡雜居也。土宜糜・麦・蒲萄。
林樹稀疎。氣序風寒、人衣氈褐。素葉已西数十孤城、城皆立長。雖不相稟命、然皆役屬突厥。
『大慈恩寺三藏法師傳』
循海西北行五百餘里、至素葉城。逢突厥 葉護可汗。方事畋遊、戎馬甚盛。… (中略) …
既与相見、可汗歡喜云、「暫一處行、二三日当還。師且向衙所」。令達官答摩支引送安置。
- 2) 筆者の一人安倍は、東京文化財研究所のアソシエイト・フェローとして2011年度から2013年度のアク・ベシム遺跡の調査に携わった。
- 3) ヴァレリー・コルチェンコ氏からの私信。
- 4) クンボロト・アクマトフ氏からの私信。
- 5) 中央アジアの事例に関しては、査読者の方からウズベキスタンのコイ・クリルガン・カラ (前4~後4世紀) からの出土例などをご教授頂いたが、中央アジアでのより詳しい出土事例の集積は今後の課題としたい。

参考文献

Abe, M. 2014 Results of the Archaeological Project at Ak Beshim (Suyab), Kyrgyz Republic from 2011 to 2013 and a Note on the Site's Abandonment. *Intercultural Understanding* 4: 11-16.

Amanbaeva, B., Kolchenko, V. A. and K. A. Sataev 2013 Kyrgyzstan. In K. Baypakov, Sh. Pidaev, and R. Muradov (eds.), *The Artistic Culture of Central Asia and Azerbaijan in the 9th-15th Centuries Volume IV: Architecture*. Samarkand, International Institute for Central Asian Studies.

Bejanaru, L., Monah, D. and G. Bodi 2010 A Deposit of Astragali at the Copper Age Tell of Poduri-Dealul Ghindaru, Romania. *Antiquity* 84 Issue 323 (<http://www.antiquity.ac.uk/projgall/bejanaru323/>).

Dandoy, J. 1996 Astragali, the Ubiquitous Gaming Pieces. *Expedition* 38/1: 51-58.

Erdenebaatar, D. 2010 Cemetery Gol Mod-2, Tomb1 Complex in Mongolia. 中国考古与世界考古学国際学術検討会.

Gilmour, G. 1997 The Nature and Function of Astragalus Bones from Archaeological Contexts in the Levant and Eastern Mediterranean. *Oxford Journal of Archaeology* 16/2: 167-175.

Johannesson, E. G. 2011 *Landscape of Death, Monuments of Power: Mortuary Practice, Power, and Identity in Bronze-Iron Age Mongolia*. Ph D Dissertation Submitted to the University of North Carolina.

Jones, J. and V. Joseph 2008 Excavations of a Xiongnu Satellite Burial. *The Silk Road* 5/2: 36-41.

Kovalev, A. and D. Erdenebaatar 2009 Discovery of New Culture of the Bronze Age in Mongolia according to the Data Obtained by the International Central Asian Archaeological Expedition. In J. Bemmman, H. Parzinger, E. Pohl and D. Tseveendorzh (eds.), *Current Archaeological Research in Mongolia*, 149-170. Grossburgwedel, AALEXX GmbH.

Mallory, J. P. 1991 *In Search of Indo-Europeans: Language, Archaeology and Myth*. London, Thames and Hudson

Miller, B., J. Bayarsaikhan, T. Egiimaa and C. Lee et al. 2008 Xiongnu Elite Tomb Complexes in the Mongolian Altai: Results of the Mongol-American Hovd Archaeology Project, 2007. *The Silk Road* 5/2: 27-35.

Minniti, C. and L. Peyronel 2005 Symbolic or Functional Astragali from Tell Mardikh-Ebla (Syria). *Archaeofauna* 14: 7-26.

Shaeffer, C. F. A. 1962 *Ugaritica IV*. Paris, Librairie orientaliste Paul Geuthner.

Vlassov, A. 2010 Russian Geographical Society's Archaeological Expedition in Tuva: More Revealing Findings. Homepage of Russian Geographical Society (<http://int.rgo.ru/news/russian-geographical-society%E2%80%99s-archeological-expedition-in-tuva-more-revealing-findings/>)

Watson, P. J. 1979 *Archaeological Ethnography in Western Iran*. Tucson, the University of Arizona Press.

Watson, P. J. 1983 The Soundings at Banahilk. In L. S. Braidwood, R. J. Braidwood, B. Howe, C. A. Reed and P. J. Watson (eds.), *Prehistoric Archaeology along the Zagros Flanks*, 545-613. Chicago, the Oriental Institute, the University of Chicago.

Yoffee, N. and J. J. Clark (eds.) 1993 *Early Stages in the Evolution of Mesopotamia Civilization: Soviet Excavations in Northern Iraq*. Tucson, the University of Arizona Press.

加藤九祚 1997 「セミレチエの仏教遺跡」『中央アジア北部の仏教遺跡の研究 (シルクロード学研究 Vol.4)』121-184頁 シルクロード学研究センター。

ケンジェアフメト、スリアン 2009 「スヤブ考古—唐代東西文化交流」窪田順平・承志・井上充幸 (編) 『イリ河歴史地理論集—ユーラシア深奥部からの眺め』217-301頁 松香堂。

ツァスチヘル・ウルジーバト 2006 『モンゴルにおける伝統的な子どもの遊びについての研究』三重大学提出修士論文。

中日新聞社 1979 『古代トラキア黄金展』。

内藤みどり 1997 「アクベシム発見の杜懷寶碑について」『中央アジア北部の仏教遺跡の研究 (シルクロード学研究 Vol.4)』151-184頁 シルクロード学研究センター。

山内和也・小澤 毅・津村宏臣・相馬秀廣・安倍雅史・山藤正敏・芝康次郎・渡邊俊祐・森本達平・ベグマトフ、アリシエル 2012 「キルギス共和国チュー河流域の考古調査、2011年」『第19回西アジア発掘調査報告会報告集』86-92頁 日本西アジア考古学会。

山内和也・古庄浩明・中村俊夫・安倍雅史 2014 「キルギス共和国チュー河流域の考古調査、2013年」『第21回西アジア発掘調査報告会報告集』46-51頁 日本西アジア考古学会。

山内和也・森本 晋・安倍雅史・久米正吾 2013 「キルギス共和国チュー河流域の考古調査、2012年」『第20回西アジア発掘調査報告会報告集』46-51頁 日本西アジア考古学会。

松谷敏雄 1992 「ラメ・ザミン遺跡出土の加工痕のある3点の骨について」『東洋文化研究所紀要』118冊 127-148頁。

安倍 雅史

東京大学

Masashi ABE

The University of Tokyo

新井 才二

東京大学人文社会系研究科博士課程

Saiji ARAI

The University of Tokyo